

No. 885

# 炉辺民芸 **いのしへ** —新潟—

新潟県新井市の山間部、そこに民芸品の故郷、平丸部落がある。一年の大半が雪に被われるこの地方では昔から炉端でミノガサやワラグツを細々と作ってきたという。その合間に子供達の玩具として作られてきた馬や牛、そして猪。

これらが民芸品として最近とみにその脚光を集めてきた。そんな折、今年の干支猪がお年玉年賀切手に取り上げられ部落をあげて生産に追われている。手のこんだ猪作りはどんなにいそいでも一日に3個がやっとという。とうとうと燃える囲炉裏の火、その炉端から昭和46年が始まった。

# 父のいない村 —秋田—

長く厳しい冬がまたやってきた。

『お父は帰ってくるだろうか』子供達は心の中で呟いてみる。

秋田の雪深い山奥。百合村に住吉小学校がある。全校生徒140人余りの小さな小学校だ。子供達は、くったくな笑い、毎日の生活のなかに暗い影は見えない。今日も雪だ。子供達は、運動場で思いきり雪合戦を楽しむ。どの顔も楽しそうだ。

この村には、働き盛りの男は誰もいない。皆、東京の近くの工業地帯に出稼ぎにいっているからだ。残された家族は、子供達とおじいちゃん、おばあちゃん、それに牛や猫だ。

時折、『お父』からくる手紙を何度も何度も読み返す。子供達は『お父』へ手紙をつづった文集をつくった。それを出稼ぎ先の父親に送った。もう三回目になる。ここ数年、出稼ぎ労働者の悲劇が数多く報じられている。その度に子供達はじめ残された家族は、安否を気づかう。

子供心に小さな胸をいためる。

父親の手に届いた手紙の文集はどんなにか『お父』のはげみになったことだろう。

つたない字で、しかし精一杯つづられた手紙の文集。どの頁にも『元気でね』『早く帰って!』という言葉がみあたる。

それは子供達の明かるく見える表情の奥にかくされたほんとうの気持なのだ。

『出稼ぎとは何だろう?』一人の子供がこう書いた。

この子供の声は『お父』に届いた。『あ父』はきっと胸をつまらせたことだろう。この声は『お父』ばかりではなく、高度成長をとげる日本の社会のすみずみに今、届かなければいけないのだ。